

漱石主宰の「朝日文艺欄」(資料)

遠藤祐編

The Literary Column of the ASAHI, edited by Soseki Natsume (Data)

TASUKU ENDO

はじめに

夏目漱石の主宰した明治末年の「東京朝日新聞」文艺欄は、いつぱんに「朝日文艺欄」とよばれて、すでに反自然主義の一拠点として注目されているものである。それは漱石門下の若い評論家達の活動の舞台となったわけだが、これまでその実態の詳細はかならずしも明らかにされてはいなかった。さいわい当時の「東京朝日新聞」を閲覧する機会があったので、ここに文艺欄の目録を編んで、その動向を知る手がかりにしたいと思う。もともと、漱石が寺田寅彦にあてて「文艺欄の性質は文学、美術、音楽、なんでもよし。ハイカラな雑報風なものでも、純正な批評でもいゝとして可成多方面にわたって、変化を求めている」(書簡、明治42・11・28)と書いているように、「朝日文艺欄」には、音楽・絵画・彫刻・建築・能楽などの評、海外文艺消息、滞欧印象記のたぐいが少からず掲載されている。本稿作成の目的は、明治末年の思想・文学の状況をほうふつするところにあるので、如上の文章のうちそれにかかわると認められるものをとりあげ、他は割愛した。したがって以下に掲げるのは、総目録ではなく、「要目」である。

※ ※ ※

「朝日文艺欄」は、明治四十二年十一月二十五日の「『煤煙』の序」

(漱石)にはじまり、四十四年十月十二日の「セイヌエマルヌ運河」(石井柏亭の滞欧印象記)を最後に紙面から姿を消す。ほぼ二年間継続したわけである。開設ならびに廃止にさいして、べつに社告その他の掲載はない。

当時の「東京朝日」は、一面(一ページ)八段組み、一段六十七行十八字詰で、八ページだてというのが通常の体裁であった。文艺欄の定位置は三面の下段である。三面の最下二段近くは前から小説の掲載箇所(ほかにいわゆる絵入通俗小説が七面にあった)であったが、そのすぐ上の一段半から二段半くらいが、文艺欄のためにさかれたのである。ただしこのわりつけの方式は厳密にまもられてはいない。文艺欄はときに四面、六面あるいは八面に移されることもあった。また注記したように、小説は四十三年十二月十六日から六面に掲載されるようになった。なぜそうなたかは明らかでない。このとき長身胃腸病院に入院中で、文艺欄の編集に直接タッチしていなかった漱石も「如何なる事情にや」(明治43・12・17、森田草平あて書簡)と不審を発しているが、ともかく以後小説の位置は六面最上段となり、これは文艺欄廃止のちもずつと踏襲されていく。それでおちついたかという、四十四年一月のように、文艺欄が四面にまわつて、小説が三面に出たり(四日)、文艺欄が休載となつて小説がかわりにのる(六日、

三十一日)という例があつて、なお不安定さを残している。いま休載のことにふれたけれども、開設期間をおしてみると、文芸欄を欠く日がかかり多いのに気づく。それも定期的に休むというのならまだしもだが、きわめてアト・ランダムなのである。大谷正信あての漱石書簡(明治43・1・21)を参照すれば、本来毎日掲載を趣旨としたようだが、開始してまもない四十三年の一月にすでに五日の休みをみている。つづいて二月には八日、三月には九日、四月には四日という調子で休載がくりかえされ、廃止までに多い月では十一を数えている。毎日掲載が実行されたのは四十四年の五月と八月のみであつた。この点について小宮豊隆は『夏目漱石』のなかで、「記事が輻湊して来ると、編輯部の方では、とかく文芸欄を休んで、そのスペースにその記事を持ち込んだ」と事情を説明しており、漱石自身にも「近頃文芸〔欄〕不規則にてすぐ出す訳に参らず」(明治43・3・19、阿部次郎あて書簡)ということばがあつて、文芸欄の掲載が社の都合に左右されてかならずしも思うようにはいかない状況にあつたことをもの語っている。

このような文芸欄の動きは、社内でそれがどのようにみられていたかを暗示するようである。(継子扱い)といえればいささか度が強すぎるかもしれない。がそういう傾きがないのではなかつたと思う。小宮豊隆が、文芸欄は社の編集部にとつては「必要の場合には、どしどしそこへ喰い込んで行つても構わない場所だつたに違いない」(『夏目漱石』と記している)こともうなづかれるのである。

なお、四十三年四月三十日には、「稟告」として夏目金之助の名前で、「爾後文芸欄への通信、投稿、寄贈の書籍雑誌等」はすべて漱石の自宅へ送るようにしてほしいという記事が文芸欄の終りにのつている。社の方へ直接あてられるものが多く、そのため仕事が円滑に進まないで、編集責任者として一言したものであろう。「稟告」掲載のいきさつについて、さらに推察をくわえれば、これは小宮豊隆のいう

「直接社の方へ持ち込まれた原稿や、社の方から勝手に頼んだ原稿で、文芸欄に関係のあるものが、漱石の相談なしに、文芸欄と同じ面に掲載され、どうかするとそれを掲載する為に、文芸欄を圧迫し、文芸欄を休載することも、屢あつた」(『夏目漱石』)という事態と関係があるのではなからうか。編集の下働きをしていた森田草平や豊隆は、右の事態が起こるたびに、社の編集部へ注意してくれと漱石に強く申しでたというが、そのような漱石側の内部事情がひとつにはこの「稟告」となつて表われたとも思われる。豊隆のいうような原稿が具体的どれをさすのかはたしかめがたい。しかし文芸欄全体をみわたしたところ、その記事にはほとんど署名があるのに、四十三年の三月から四月にかけて、無署名ないしは(△△△△×無名氏)と記されたものがいくつかあることは、「稟告」の掲載と関連して注意されるところである。ついでにふれると、四十四年の三、四月中に文芸欄の休載が多く、かわりに石井柏亭の滞欧印象記(これは五月から文芸欄扱いとなつた)や杉村楚人冠の「越後記」がその場所をしめて、豊隆が漱石に不満の意を表わしたことがある(明治44・4・19、豊隆あて漱石書簡参照)。この柏亭や楚人冠のものは「社の方から勝手に頼んだ原稿」にあたるのであろう。

「朝日文芸欄」の執筆者はかなり多数であり、顔ぶれもまた多彩である。そのうちおもなところをあげてみると次のようになる。もつとも頻繁に書いているのは、やはり漱石であり、門下生の森田草平(蒼瓶、S・M生、己の字)、安倍能成(東渡生、Y・A生、雲助、蒙生)、小宮豊隆(蓬里雨)、阿部次郎(峙楼、J・A、痴郎)もいわば常連といつた形で活動している。安倍能成の回想「配達した朝日」(週刊朝日)別冊昭和33・5・14発行)によれば、この四人が「特に世間から漱石門下の代表のようになつて、文壇の*〔一〕派のようになつて考えられた」(*原文では活字がおちて空白になつてゐるが、おそらく〔一〕であろう)のである。そのほかに、門下生では津田青楓、寺田寅彦、野

上豊一郎（白川、鬼羽扇）など、門下生の友人ないし同じ世代では生田長江、石井柏亭、石川啄木（大木頭）魚住折蘆、太田善男（Y・Oはその匿名か？）、斎藤与里、吹田順助（蘆風）、宮本和吉、武者小路実篤などが寄稿しており、また内田魯庵、大塚保治、荻原井泉水、片山孤村、桐生悠々、厨川白村、桑木敵翼、杉村楚人冠、薄田泣菫、茅野肅々、徳田秋江、中村吉蔵、中村星湖、森 鷗外（藜吾野人）などの名前も見られる。

「木精」をよせた藜吾野人が鷗外であることは、鷗外日記の明治四十三年二月二十日の項に「森田米松来て午餐す。東京朝日新聞木精の報酬に、雑道具の駕籠をおくりおこせつ」とあるのによつて明らかである。当時生方敏郎はこれを漱石と断定して嘲弄的な攻撃文を「読売新聞」に書いた。「木精」は散文詩風の小品と見られているが、注に記すようなまえがきがあつて、これが鷗外ないしその意をうけた草平の筆になるとすれば、鷗外としては現実批判の意をこめて書いたものということになる。戸川秋骨はしばしば登場して文明批評的な発言を多くしている。はじめのころ数回にわたつて掲げられた「薩摩汁」（あるいは「さつま汁」という題の時評の執筆者中「愚翁」とあるのは、秋骨の匿名である（明治44・3・30、秋骨あて漱石書簡参照）。「薩摩汁」にはなお「愚禿・愚徳」の署名があるが、それらが「愚翁」と同一人かどうかはわからない。桐生悠々はジャーナリスト、当時「信濃毎日新聞」にいて文芸欄にしばしば自然主義攻撃の文章をよせた。「太陽」臨時増刊（明治44・2発行）の「明治四十三年史・第七文学」の部に「東京朝日一派」として森田草平、阿部次郎とともにその名があげられていて、目だつ存在であつたようだが、その言説には独断が多く、適切な批判とはなりえていない。杉村楚人冠もジャーナリストで「東京朝日」の最高幹部のひとり、四十四年調査部を創設しその部長となつた。漱石と親しく、新聞のあり方に一見識をもつていた。近松と名のる前の秋江が三回ほど登場して、「自然主義の家元たる」文章

世界」それと握手いたしました「早稲田文学」此の二つが同盟を結んで文壇に多くの貢献をもいたしました。が、害毒をも流しました」（「世迷言」などと、自然派一辺倒でない口ぶりをみせているのはおもしろい。中村星湖が顔をだしているのは異例に属するが、これは小宮豊隆が文芸欄でした批判にたいして、「犬の遠吠見たいなことはしたくないから」（「崖から」まえがき）同じ場所で答えたいというので、漱石に申し入れをした結果である。

※ ※ ※

漱石にはやくから文芸欄を設けたいとの希望があつたことは、明治四十一年二月一日の戸川秋骨へあてた書簡に「例の朝日文学欄につき玄耳氏と篤と相談致したる処此三四月に至り紙面拡張の意見実行出来れば附録ごとに文学もの入要なれどそれまでは閑文字の入れ所なき由」一「小生も右文学欄の出来るのを待ち居候へども是は単に編輯者の一存故主権者の方ではどうなるやら分らず候」とあるのによつてわかる。「例の」と書いているから、これより前に漱石は「文学欄」について秋骨と話したはずであり、右の文面からみて、小宮豊隆の想像するように、漱石の方から渋川玄耳に相談をもちかけ、玄耳がそれに答えて新聞社側の事情を説明したと考えることができる。けれども、この書簡以後、翌年の十一月二十日に、文芸欄の設置がきまつたこと、寄稿を願いたいことを大塚保治に報じるまで、漱石は文芸欄の問題にはまったくふれていない。「上野理一伝」（昭和34・12、朝日新聞社刊。本書の漱石伝記資料としての価値については、瀬沼茂樹氏が『夏目漱石』のなかで注意している）は、村山竜平とともに朝日社の無限責任社員であり、一年交代で社長の椅子にすわつていた上野理一の伝記であるとともに、創設以来社の内情をかかなり綿密に記した資料だが、それにも文芸欄設置のいきさつはひとことも言及されていない。附載年譜中の該当個所に、漱石が文芸欄を始めたとの記述があるにすぎない。同じ性格をもつ「村山竜平伝」（昭和28、朝日新聞社刊）にして

も、四十二年十一月に文芸欄を設け漱石が主宰した云々とあるきりである。また『三代言論人集』（時事通信社刊）におさめられた「池辺三山」（笠信太郎執筆）・「鳥居素川」（伊豆富人同）・「杉村楚人冠」（美土路昌一同）の各伝記、および笠信太郎の「漱石と三山」（『週間朝日』別冊、昭和33・5・14発行）にもこのことを伝える文章は見当らない。それゆえ、漱石と支耳との「相談」がその後どういなりゆきをたどったかは、いまのところ不明というはかばかきではないのである。ただ支耳のいった「紙面拡張」のことは、「上野理一年譜」に照らしても記載がないから、実現をみながったと考えられる。とすれば漱石の話もそのまま消えなくなったものであろうか。しかしまた、文芸欄設置の意向が支耳をとおして「東京朝日」のほかの編集スタッフ、たとえば漱石にあつい信任をおき、漱石も全幅の信頼をよせていた主筆の池辺三山にまったく伝えられなかつたともいえない。小宮豊隆は、漱石が三山か誰かに進んで働きかけたかどうかは疑問だといひ、「是は『国民』に新設された文芸欄（*明治四十一年十月高浜虚子が『国民新聞』に入社して文学欄が設けられた）に漱石がちよいちよい書くといふことから刺激を受けて、漱石を純粹にモノポライズし、漱石に今までよりもっと書かせる目的の下に、社の方から積極的に、文芸欄を創設する議に乗り出して来た」と解釈する方が、遙かに自然でありさうに思はれる（『夏目漱石』）としている。文芸欄があつたらいいという気持でいた漱石のことを考えると、豊隆の解釈はやや朝日社側からいような気もする。事実の点は別として評価の面ではその公平さがかく問題にされる『夏目漱石』であつてみれば、なおのことその思いが増してくる。だがいちがいにそうと片づけてしまえぬふしもある。森田草平の『続夏目漱石』によると、文芸欄をはじめめるさいに漱石は社の方では自分に少しでも余計に書かせるつもりで設置を許したのだと話したという。右の解釈はそのことの記憶のうえに成りたつていゝるのではないか。しかも、『村山竜平伝』は「漱石入社翌月から、東

京朝日では「月曜附録」を創め、漱石と二葉亭の短編や隨筆、文学批評の類をおさめた」ことを伝えている。月曜附録の文芸欄は「大阪朝日」に先例があり（明治三十二年角田浩々歌客を編集主任としてはじめられた。『上野理一伝』による）、東京もそれにならつたものだろうが、してみると「朝日」が文芸欄に無関心だつたわけではない。しかし「漱石と二葉亭」とあるのに注目すれば、豊隆のいう「モノポライズ」したい気持が社の方にあつたとするのは的はずれではないとも思われる。その辺をたしかめるには、なお『東京朝日新聞編年史』『池辺三山』（『朝日文庫』23）などに当つてみる必要があるかと思ふが、身近かにそれらの資料がなく、未確認である。

ともかく、「東京朝日」編集会議の空気は、いつのころからか「芸術文学の批評」を掲げる必要を認める方向にかたむき、その結果「さう云ふ種類のものをもまとめて」漱石の管理下におくことにして、文芸欄の設置が実現するにいたつた（明治42・11・29、中島六郎あて漱石書簡参照）。設置がきまつてからのいきさつは、小宮豊隆の『夏目漱石』のほか、森田草平の「自然主義時代に演ぜられた『朝日文芸欄』の役割」（『早稲田文学』昭和2・6）、『続夏目漱石』に詳しい。草平は漱石の内意をうけて編集の実務を担当し、豊隆がそれをたすけることになつて、文芸欄は動きだすのである。

※

※

※

「朝日文芸欄」が発足してから半年ほどして、漱石は畔柳芥舟に手紙を書いている（明治43・4・12）。それは「貴墨拜誦」とあるとおり、芥舟の手紙にこたえたものだ。文面から逆に推察すると、芥舟は文芸欄が自然主義批判にかたよつてゐることを指摘したらしい。それについて返書では、自然主義がどうなるうと本来はかまわないのだが、「自然主義を振り廻す人と同商賈故何うでもよくなくなり候。それから自分は何うでもよいとしても斯ういふものに支配される若い人が沢山有之候故、矢張り何とか蚊と（か）誤訛をならべて文芸欄を賑は

し、且其人々にあまり片寄らぬ様な所見を抱かし度考になり候」とのべている。ここに漱石の文芸欄にたいする態度をみてとることができると思う。漱石にとつてそれはもちろん「東京朝日」の文芸欄であつたはずだ。つまり、この欄の編集責任者として、漱石はあくまで「一般読者並びに文芸好きの人に興味のある様な事」（同上書簡）をのせていくべき立場にあつたのだ。にもかかわらず、「自然主義を振り廻す人と同商賈」の、作家・評家としての自分を考えたとき、当面の文壇状況にたいして、どうでもよいで済ましてはいられなくなる。すると文芸欄はおのずからその発言の場として意識されるようになる。そういういつた漱石の姿がこの書簡をとおして指摘されるのではないか。文芸欄による門下生達の活動ぶりをながめたときの心持も、おそらく同様であつたにちがいない。「何とか蚊と「か」誤訛をならべて文芸欄を賑はし」ということばは漱石ひとりを書きさすようにもとれる。しかし、この書簡を書くまでに漱石が掲げた文章で自然主義論と目されるのは、「客観描写と印象描写」（明治43・2・1）一編にすぎない。「誤訛をならべ」というからには、草平・能成・次郎・豊隆・折蘆らの評論が念頭にあるとしてよいだろう。草平は『続夏目漱石』のなかに大略次のような出来事を記している。——文芸欄の開設に先だつて漱石は草平に、編集方針について意見を求めた。そのとき草平は、豊隆その他の門下生とはかつたうえ、「世間には既に『早稲田文学』や『文章世界』など、いづれも隅を作つて遣つてゐるから、それに対して、自分達の方でも一つの機関が欲しい。頼む人は吾々の主張に好意を持つてくれさうな人だけにしたい」と申ししたが、漱石はべつに難色を示さなかつた、というのである。この容認は、如上の見方からすれば、漱石として自然のものだつたと思われる。

漱石は「門」を脱稿したのち、四十三年の六月に胃潰瘍のため長与胃腸病院に入院し、病牀から文芸欄編集の指揮をとることになった。そして八月修善寺におもむくさいには、不在中は何事も池辺三山に相

談してとりはからうようにと、草平に言い残していった。衆知のように、修善寺で大吐血がきて危篤におちいつた漱石は、それから脱出して東京へ帰つてからも、入院生活を続けなければならなかつた。退院できたのは四十四年の二月末である。草平は、漱石の不在中および入院中文芸欄を維持できたのは「一重に三山先生の庇護」があつたからだと書いている。ただし退院した漱石がすぐ編集責任者に復帰したのではなかつた。病牀にあつても健康が許すようになると、文芸欄に ついての注意を草平や豊隆にあたえていた漱石だが、ふたたび責任者として原稿に眼をとおすようになったのは、三月末のことである（明治44・3・30、戸川秋骨あて漱石書簡参照）。その間に小栗風葉のあと小説を草平がうけもつことになり、編集助手の名目はそのままにして、実務を豊隆が主として担当することになった。このとき草平の書いたのが「自叙伝」である。

※ ※ ※

「自叙伝」は四十四年の四月二十七日から七月三十一日まで続いたが、連載中から社内の評判はよくなかつた。漱石日記の六月十日のところに「会議に出る。森田の小説不評判、半ば弁護、半ば同意して帰る」とある。この「自叙伝」にむけられた不評が起爆剤の作用をして、池辺三山の退社、文芸欄の廃止、漱石の辞表提出という問題をひきおこすことになつたのである。

笠信太郎の「池辺三山」によると、「自叙伝」をめぐる社内に「反道徳的で面白くない」とか「同じ題材の小説（『自叙伝』は「煤煙」と同じ素材を扱つた）を二度載せるのは怪しからん」という反対論がおこり、それにともなつて文芸欄そのものへの非難、「三山が漱石を擁護しすぎるから若い連中が勝手なことをするのだ」との声をあげるものもでた、という。そのような非難、反感がやがておおよげの席で爆発し、三山もその所信をのべて一步もゆずらなかつた。小宮豊隆が「内容が、少しも分らない」（岩波新版漱石全集26・解説）と書い

ている「劇論」がこれで、『上野理一伝』に詳しい記述がある。次にひいておきたい。

九月十九日に開かれた「東京朝日」の評議会（*四十二年十二月に設けられた最高主脳会議）の席上で、外勤部長の弓削田秋江（*精一）が、漱石の主宰する文芸欄（*中略）の攻撃を行い、そのころ森田草平が連載していた「自叙伝」（*中略）が特に反道徳的だといつてきめつけた。「自叙伝」は「煤煙」の続編であつて、当時、そのような非難は社の内外でも聞かれたものであつた。池辺は、これに対して信ずるところに従つて文芸欄擁護論をくりかえし、漱石と、その門下のために弁じ、「自叙伝」は反世俗ではあるが、反道徳的といちがいには貶すわけにはいかぬと説いたが、一本気の弓削田は執拗なまで追究し、

「貴方が文芸欄を擁護するのは情実によるものだ。」と話寄つたので、それまで休えていた池辺の憤懣がいちどきに爆発した。

「それなら僕は責を負つて辞職するから、君もやめ給え」同席の人々も取りなすすべを忘れて全く途方にくれた。弓削田も後になつて、自分の一量見から飛んでもない事件をひき起したことを悔い、池辺の家を陳謝のため訪れたが、怒りはとけないで門前から返されてしまつた。

こうして三山は九月三十日づけで主筆の職をしりぞき、客員となつたのである。当時漱石は、八月中旬大阪で胃潰瘍を再発、それがおさまると痔の手術をするというありさまで、ずっと出社していなかつた。この騒ぎを知つたのは、十月三日に三山の来訪をうけたときである。前にひいた日記にあるように、漱石は「自叙伝」の不評を直接聞いていた。おそらく文芸欄にたいする非難のあることも耳にしていたにちがいない。そのうえに評議会の顛末を知らされたとき、漱石はこの事件における自己の責任を痛感せずにはいらなかつたのである。

文芸欄で「若い連中が勝手なことをする」のを許し、したがつてそれが「東京朝日」のというよりも、漱石とその門下の文芸欄と目されるようにしたのは、結局漱石自身にほかならなかつたともいえるのだから。

三山来訪の翌日に書かれた弓削田精一あての書簡は、よく漱石の心痛をも語っている。三山の退社には、「自叙伝」や文芸欄の問題以外に、より深い背景——白瀬中尉の南極探検後援をめぐる三山と上野理一・村山龍平との意見のくいちがいがある。けれども、漱石にとつては、問題は文芸欄そのものにあると考えられた。この騒ぎのために、文芸欄は十月十二日の柏亭文を最後に休載をつづけていたのだが、熟考のすえ、それを廃止することにきめ、草平の解任とあわせて評議会に提議して可決されたのが、十月二十四日のことであつた。翌日漱石は小宮豊隆に一書を送つて、廃止を決意した自身の気持ちを忌憚なく伝えた。

豊隆あての書簡はまず、漱石が文芸欄私有化にたいする社内非難を念頭におき、「東京朝日」の一社員としての自身の立場を十分に考慮したことを示している。「文芸欄を維持する積なら維持はいくらでも出来る、又改良も出来る。然しさうすると他人の領分へは口を出し悪くなる」とか「自分の直轄してゐる文芸欄の棒を永久流して仕舞つた。是は僕が猶将来に朝日をより好くし得る見込を抱いた為であつて、決して自分の地位を安固にするため他人の云ふ通りになつたのではない」ということばがそれである。漱石にとつては文芸欄をやめてしまふのは大きな心残りだつたにちがいない。けれども一社員として新聞全体の発展を考えたとき、それもやむをえぬ措置だとしなければならなかつたのであろう。つぎに、そこには小宮豊隆のいう「若い者」に「反省を求めよう」（『夏目漱石』）とする気持がたしかにある。文芸欄が「君等の気焰の吐き場所」になつたと断言し、「あれで好いつもりで発展したらどうなるだらう」とたえず心配になるから、「文芸欄なん

て少しでも君等に文芸上の得意場らしい所をぶつつぶしてしまつた方が或は一時的君や森田の薬になるかも知れない」と漱石は書いてゐる。しかし、さらに注意して読めば、この書簡は決して平静な態度で書かれてはいない。「ぶつつぶしてしまつた方が」とか、先の方にある「笑ふとも怒るともして呉れ玉へ」というような文句にふれると、漱石が豊隆にむかつて（間接には草平にたいしても）胸中のかたまりをぶつけているとの思いが、どうしてもわいてくる。文芸欄を失い、三山の退社をみたその責任は、つきつめれば自分にある。とすれば自分を責める以外にどうしようもない……にもかかわらず、そう考えておさまりきれない漱石の心情が、ここにはある。この場合ある意味では漱石もまた被害者なのだ。いくら容認されたとはいへ、草平や豊隆が多少とも新聞の文芸欄という性格に注意していたなら、問題はそれほど深刻にはならず済んだはずである。漱石の鬱憤が草平や豊隆のうえにはけ口を求めたとしても不思議ではあるまい。

※ ※ ※

「東京朝日」の評議会で文芸欄の廃止が決定された一週間後の十一月一日に、漱石から辞表が提出された。しかしこれは社側の慰留によつて撤回され、事なきをえた。この出来事の真相はまだ十分明らかになつていない。三山への義理と友情を尊重する気持が動いていたにはちがいないが、辞表提出の理由はそれだけではないようである。笠信太郎は「池辺三山」で、ひとつの資料として、三山の鳥居素川にあつた書簡（明治44・11・15）を紹介している。それには「夏目君も滔々辞職申出相成、目下小生手配中に候所、果して引留め出来可申哉、頗る覚束なく候。渋川の不都合より起る者とす。強ち小生に対する斟酌のみにあらず」とあり、また三山がしりぞいたあとの社内では「渋川が重用せらるゝ事と成り、夏目君は胸を悪くしたる次第に候」とも記されている。漱石と玄耳の間に何かかなり深刻な感情上の齟齬があつたことがわかる。そのへんは、あるいは文芸欄の存廃にかかわ

るのではないかと思うけれども、いまはまだふれるべき段階にない。

▼ 目録の最上段の数字は日づけ、く印は継続を示す。（*）は編者の注記である。匿名はわかたかぎりにおいて本名を記した。文芸欄開設中の小説の動向、および参考事項は○印のもとに、また個々の記事についての参考事項は「注」として、各月のおわりに掲げた。

▼ 本目録の作成は岩手大学附属図書館蔵の「東京朝日」により、欠けたところを国会図書館蔵のもので補つた。ただし四十三年の六月は国会図書館でも閲覧できなかったため、岩手大学蔵の原本に欠ける六月一日の分は未確認に止まつた。「自由劇場の印象」（6・1）は「評論年表」（『現代文学論大系』8）の記載にしたがつたことをおことわりしておく。

不備の点は早い機会に補正したいと思う。

◆明治四十二年◆

十一月

- 25 『煤煙』の序（*岩波新版全集21に収録） 夏目 漱石
- 26・27 美術と文芸（*談話筆記） 大塚 保治
- 29・30 空疎なる主観（*自然主義の人生観を論評する） 安倍 能成

十二月

- 1 俳優無用論（*新劇における脚本尊重の必要を説く。「影と声」に収録） S M 生
- 2・4 官学私学及文学（*官憲の文芸干渉問題に触れる） 戸川 秋骨

5 個性を没し得ざる寂味 (* 近代人の個性的傾向についての感想)

小宮 豊隆

6 仮装文学を排す (* 文壇の現状を西洋文学の模倣だと非難する)

文泉子

10 驚嘆と思慕 (* 「影と声」・角川版全集に2収録)

阿部 時楼 (* 次郎)

11・12 新聞雑誌こゝかしこ (* 森しげ女「波瀾」へ「スバル」)、荷風

「隅田川」・田中喜一「生活の価値生活の意義」・長江「長篇短

篇の差別を論じて小説界近時の通弊に及ぶ」へ以上「新小説」(評など)

蒼 瓶 (* 森田 草平)

13・14 抱月氏の為に惜む (* 島村抱月「覚えがき」へ「早稲田文学」

注2の「告白論」批判) 小宮 豊隆

17・18 真を求めたる結果 (* 「科学的的人生観としての自然主義」を

論じ、事実と真とが「一つにせられた」ことにたいし、「深

疑なきを得ぬ」とのべる) 魚住 折蘆

20 薩摩汗 (* 時評。シエンケウイッチ・魯庵訳「二人画工」の

発禁、自然主義の専横ぶりその他) 愚 禿

28・29 自然の人と社会の人 (* 自然主義思想と個人主義との関係を

説く) 戸川 秋骨

○この月、十二日で鏡花の「白鷺」が五十九回で完結、十三日から

荷風の「冷笑」が連載されはじめた。

注1 啄木が「文泉子に与ふ」(岩波版全集9に収録)を書いてい

る。

注2 十八日は六面に掲載。

注3 二十九日は八面に掲載。

◆明治四十三年◆

一月

1 元日 (* 隨筆。岩波新版全集21に収録)

漱 石

3 進化論より観たる自然主義

桐生 悠々

5 東洋美術図譜 (* 紹介。岩波新版全集20に収録)

漱 石

6~8 VITA SEXUALIS (* 鷗外の「キタ・セクスアリス」発禁

問題をめぐる文明批評) 魯 庵 生

9・10 人生に触れざる感 (* 自然主義の現実重視の主張にたいし、

それに安住できぬ自己の心情を説く) 安倍 能成

11~14 正月の新聞雑誌 (* 白鳥「浴医の家」へ「中央公論」・「噂」

注1

「早稲田文学」、藤村「家」へ「読売」連載、敏「渦巻」へ「国

民新聞」連載、荷風「冷笑」などの評。冒頭に創作界の単

調さを指摘し、「此処で一転化することが必要だ」という)

蒼 瓶

15 さつま汗 (* アンドレーフの「人の一生」を自由劇場が五月

に上演する旨を聞き、それが上演にむかぬことをのべる)

16・17 木精 (* 岩波新輯定版全集・著作篇2に収録) 愚 徳

性欲と小説 (* 魯庵生文への批判。性慾描写の限界を説く)

21・22 20 翻訳家に望む

同記事中に蒼瓶が杉村楚人冠の「変な女」を「新聞の雑報体

25・26 注1 書き流したもので、事実だから面白い」と評したのでにたい

し、これをジャーナリズム軽視ととった楚人冠が十五日の「新

虎 穴 生

注2

「このかくし名を用ふべく余儀なくされたる人の何人なるかは、この文を読めば分る。この文の中に隠されたる意味は、その何人の手に成れるかを知れば、又自から解る」というま
えがきがある。

二月

1 客観描写と印象描写 (* 岩波新版全集20に収録)

漱石

6

自ら知らざる自然主義者 (* 早稲田文学) の荷風推讃を
問題にした自然主義批判。「影と声」に「自然主義論争二篇」
として再論とともに収録され、同題で角川版全集2に収む

次郎

7

近代文学と古文学 (* 西欧文学における古典と近代との關係
を論ずる)

厨川白村

8

「凡人」を読む (* 虚子の短編集評)

東渡生

9

如何にして生きんか (* 『煤煙』出版にさいしての感想。「影
と声」に収録)

森田草平

14

作者の影 (* 描写論。平面描写以外の立場もありうることを
のべる)

青木健作

16・18・19

二月の文壇 (* 「正月の新聞雑誌」にたいし天弦の反論「偏
見か不偏見か」〔『国民新聞』〕があったこと、天弦の「今日
の感想」〔『国民新聞』〕批判 小山内薫「東京へ」〔『新小
説』、水野葉舟「旅舎」〔『中央公論』〕評など) 蒼瓶

20・21

現代社会劇を觀て(有楽座の「己が罪」(* 菊池幽芳の「己
が罪」が社会劇と銘うって上演されたことを不満とし、真の
社会劇出現を期待する)

中村吉蔵

22

「べからず」(* 発禁問題をめぐつての感想)

秋骨

23

日本の自然と光本位の絵画 (* 印象派論。山脇信徳の「停車
場の朝」にふれる)

織田一麿

注2

○この月、二十八日に「冷笑」が七十八回で完結した。
注1 相馬御風が「漱石氏の描写論」〔『早稲田文学』〕を書いて非
難した。

2・5

孤城落日の自然派 (* 自然主義はすでに過去のものだとい
う)

桐生悠々

7

超然孤独の人 (* メーテルリンクの紹介。無署名)

草平

9

自然主義論者の用意 (* 自然主義をもつて近代文芸のすべて
を包括するものとみる傾向に反対し、自然主義者はその根本
的立脚地を明確にすべきだと主張する)

セルゲイ・エリセイフ

14・15

アンドレイエフの近作「アナテマ」の批評

阿部次郎

18

草平氏の論文に就て (* 九日の草平文にある、漱石の態度は
科学的だが哲学的でないのが不満だとの指摘は誤解である旨
を一言する。岩波新版全集20に収録)

20・21・23

再び自ら知らざる自然主義者 (* 前論に反駁した御風の
「一家言」〔『読売』〕にこたえ、荷風を享楽主義とする所以を
のべる)

24

「アナトールフランス短篇傑作集」を読む (* 若月紫蘭訳の

書評)

草野 柴二

24・25

悠々

25 自然主義の矛盾 注1
26・27 日本画と云ふもの (* 日本画・洋画の区別は形式的なもので、絵そのものとしての本質的なちがいはないことをのべる)
石井 柏亭
桐生 悠々

28

風俗壞乱罪 (* 癡禁問題所感)

東渡 生

26

人格の哲学と超人格の哲学を読む (* 朝永三十郎の同書評)

29

静観か努力か (* 長谷川天溪の「努力と隠遁」〔太陽〕の批判)

太田 善男

27

新雑誌の発生 (* 最近創刊された雑誌の紹介。「芸文」「白樺」「新文芸」「創作」「三田文学」「新思潮」など。無署名)

30・31

さつま汁 (* 歌舞伎について、自然主義の浪漫的要素その他)
愚 徳

30

文芸の社会的使命 悠々

○この月、一日より漱石の「門」が連載されはじめた。
注1 この文章について高村光太郎が「琅玕洞より」〔方寸〕明治43・5、高村光太郎全集9に収録)で強く同感の意を表わしている。

五月

一 記者

祐 藤 遠

四月

1

マックス、スチルネル (* 「唯一者と其所有」論)

吹田 蘆風 (* 順助)

5

ビョルンソンの計 人生の要求と新文芸 (* 自我充実の要求を中心とする文芸を欲することをのべる) Y・O

3・6

抱月の偽自然主義 (* 抱月の印象派的自然主義批判。筑摩版現代日本文学全集94に収録) 片山 孤村

8

『牧師の家』 (* 中村吉蔵の戯曲〔朝日〕連載) 評「影と声」に収録) 小宮 豊隆

12

代助と良平 (* 「それから」の代助と「寄生木」の良平とを比較し、真の個人主義的人間像として前者に共感する。三省堂・現代日本文学講座小説4に収録) 武者小路実篤

9

理想を樹立する」ものと本質を規定する) 吹田 蘆風

14・16

さつま汁 (* 客観描写において、作者に道徳的配慮を求めらる) 愚 徳

10

賞翫者と批評家と創作家に (* 個性を發揮するとき、文芸は永遠の生命を得ることを説く) 蒼 瓶

17・18

自然主義愈窮す (* 抱月、天弦の人生観論は自然主義を逸脱するものであると主張する) 太田 善男

15

再び偽自然主義に就いて 注1 (* 「抱月の偽自然主義」にこたえ

20

独りよがりの文芸 (* 自然主義の独善性を強調する)

19

武者小路実篤

た抱月の「覚え書」〔早稲田文学〕への反駁

21 放任主義と自然主義 (* 自然主義は無責任だとする非難) 片山 孤村

24 文壇近時 (* 「三田文学」派の態度その他) 蒼 悠 瓶 々

26 郊外の文学 (* 自然主義の作物の傾向にふれる) 秋 骨
注1 抱月はほかに「最近の問題」〔新潮〕でも孤村の批判にこたえた。

六月

1 自由劇場の印象 中村 生

2 「二葉亭全集第一巻」(* 創作の巻評。「影と声」に「二葉亭全集創作の巻」として収録、角川版全集2に収む) J・A

3・4 自然主義は窮せしや (* 現代思潮としての自然主義を論評する。筑摩版現代日本文学全集94に収録) (* 阿部 次郎) 魚住 折蘆

6 自由劇場第二回試演 (* ウエデキント「出発前半時間」、チエホフ「犬」、鷗外「生田川」の評) 小宮 豊隆

8 新聞紙上の印象主義 (* 新聞記事は単なる雑報でなく、記者の見地が背後にあることを説く) 楚 人 冠

9 長塚節氏の小説「土」(* 「土」連載にあたって作者を紹介する。岩波新版全集20に収録) 漱 石

13 作家に対する要求 (* トリヴィアリズムの支配的な「今の文壇の有様」を不満とし、生の要求を刺激してくれる作品を求めたいという) 武者小路実篤

18・20・21 「それから」を読む (* 「影と声」・角川版全集2に収録) 阿部 次郎

23 24 文芸行政論——文芸保護の方針、公設美術展覧会の将来 * 談話筆記) 大塚 保治

30 自然主義と現実 (* 自然主義論における「現実」のあいまいさを指摘する) 太田 善男

○この月、十二日「門」が一〇四回で完結し、十三日から「土」が連載されはじめた。

七月

1・2 現代を支配する思想 悠 々

3 駁駁論 (* 「象徴的文芸の意義」〔帝国文学〕におけるホルツの徹底的自然主義の解釈にたいする本間久雄、小宮豊隆の疑問にこたえる) 片山 孤村

5 さつま汁 (* 女流作家観) 愚 徳

6・7 マーテルリンクの新作に就きて (* 「マリア・マグダレナ」の紹介) 小池 秋草

7・8 芸術的作物の要件 秋 骨

「冷笑」を読む (* 「初めから或る種の意見が有って、それを綴合せるために小説を拵へた様なもの」と見、外界にたいする批評は鋭く、所謂享楽の態度にも徹しているが、自己にたいする懐疑・批判がないことを指摘する。「影と声」に収め、中央公論社版荷風全集月報5に再録) 蒼 瓶

さつま汁 (* エレン・ケイの女性論を紹介する) 若 翁

13 絵日傘 (* 評壇にたいして、内容論に偏し技巧論を等閑視する傾向の是正を求め) 愚 徳

14 劇評論 (* 劇評の二つのタイプ、役者の芸の細部に執するものと脚本の人生的意義のみを論ずるものとをあげ、いずれも「芝居其物から受ける心持」を忘れているとし、自己の印象

を「正直」に書くべきだとする「影と声」に収録)

蓬里雨

(*小宮 豊隆)

15

近時の傾向 (*天弦「排主観と無批判」△「詭亮」) 批判、思想劇・情調劇にたいする不満、泣菫「超人」△「三田文学」

白鳥「徒勞」△「早稲田文学」評

蒼瓶

18

五月雨 (*個性をいかし、生命力の充溢した文芸を求め) 武者小路実篤

19

文芸とヒロイック (*岩波新版全集20に収録) 艇長の遺書と中佐の詩 (*同前)

漱石

20

鑑賞の独立と統一 (*同前) イズムの功過 (*同前)

漱石

21

個人作画展覧会 (*個展の意義をのべ、琅玕洞における正宗得三郎・柳敬助の個展を評する)

斎藤 与里

23

ザイツエフの「曙」 セルゲイ・エリセエフ

漱石

24

好悪と優劣 (*岩波新版全集20に収録)

漱石

2

うめ草 (*近時の小説についての小感) 大塚楠緒子

『NAKIWARAI』を読む (*土岐哀果歌集評。岩波版全集10に収録)

大木 頭

3

現代の批評家 (*石川 啄木)

7

「四篇」を読む (*漱石小品集△「文鳥」 「夢十夜」 「永日小品」 「満幹ところどころ」を収む) 評。 東 渡 生

10

「あそび」について (*鷗外が「あそび」の中で、「近時の傾向」の情調劇への不満を暗に諷したのに抗議する)

蒼 瓶

11

戯曲の本質 (*近代劇も内面的な葛藤を表わすという点で、戯曲の本質をふまえたものでなければならぬと論ずる)

吹田 蘆風

13

自然を離れんとする芸術 (新日本画譜の序) (*岩波新版全集21に収録)

漱石

22

自己主張の思想としての自然主義 (*国家・社会・家族というオーソリテイにたいする反抗精神としての自然主義を論ずる。筑摩版現代日本文学全集94に収録)

魚住 折蘆

24

評家と作家 田舎、田舎者、田舎文学 (*角川版全集12に収録)

悠 々

26

与へず受けざる者 (*自己の精神生活を検討して「主観の空虚」を認めるとともに、虚偽の「充塞」を排し、自己に徹すべき必要をのべる。「影と声」「山中雜記」に収録)

痴 郎

31

この月、六日の六面に「女郎買の歌」▼「悪少年」を誇称す▼「糜爛せる文明の子」という見出しを掲げた記事がある。署名の「△△」は啄木の匿名とされ、同文は岩波版全集に収録されている。

安倍 能成

ヒュマニテイの文学 (*自然主義は人間を利己的存在と見るが、それが唯一の真実ではない。人情の温かみを欲し、自己の結びつきを求めるのも人性の自然である、という)

草 平

4

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

3

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

4

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

3

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

3

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

4

詩と小説 (*芸術における主観と客観との関係を問題にする)

太田 善男

7・9	九月の小説（*薫「後悔」〔中央公論〕・葉舟「手紙の断片」〔同〕評など）	蒼 瓶	十月	
10	九月の戯曲（*荷風「平維盛」評など）	蒼 瓶	俳壇の楽観と悲観と（*子規の写生説を批判し、俳壇にも「清新なる主観」の回復が必要であることを説く）	
11	書くと書かざると（*「影と声」に収録、角川版全集2に収録）	痴 郎	荻原井泉水	
12・13	個性と統一（*个性的と統一的と、現代におけるこの二つの必然の要求をいかに調和すべきかについてのべる）	太田 善男	いろ草（*自己省察を欠いた人生批評は無意味であることを説く）	愚 徳
14	通俗と難解（*「影と声」に収録、角川版全集2に収録）	痴 郎	意志の矛盾（*現実重視と個性尊重との相剋に思想生活の真の姿を求める）	太田 善男
20・21	人生の熱愛者（*所謂人生観照の態度の浅薄さをいい、人生の「内的意味」を知ること、そのために人生を愛し、個性に徹する必要のあることを説く）	能 成	歛楽を追はざる心（*能成の「歛楽を追ふ心」における所論を肯定するとともに、一步を進めて、自らを歛楽にとらわれたものとはしたくないという心情をのべる）	折 蘆 生
22・23	誤られたる現代の文学（*世人の文学にたいする無理解を説く）	秋 骨	十月の小説（*白鳥「微光」〔中央公論〕・「盲目」〔早稲田文学〕、花袋「鶏」〔中央公論〕、星湖「ふるい家」〔早稲田文学〕、青果「日暮前」〔中央公論〕評など。白鳥につき「従来氏の作を読む毎に一種イヤな感じ」をもったが、「今度は余りそれが無い」という。その他、「紅茶の後」「冷笑」に就きて」をとりあげ、荷風の態度を論評している）	蒼 瓶
23	吉井君の歌（*「酒ほがひ」小感。岩波版全集10に収録）	啄 木	現代に殉ぜし人（*現代思潮を論じ、享楽主義の徒を、自然主義から自己主張の思想に推移する過渡期の犠牲者とする。「影と声」に収録）	蒙 生
26	俳壇漫言（*鳴雪・虚子・碧梧桐評）	坂元 雪鳥	穩健なる自由思想家（*自由思想家と自任する人々の意識の不徹底と、オーソリテイへの妥協的な態度を批判する。筑摩版現代日本文学全集94に収録）	*安倍 能成
28・29	歛楽を追ふ心（*「現代の快楽主義的傾向」にむけられる非難の浅薄さを指摘し、歛楽におもむく心情の真摯必然なることを論ずる。「影と声」に収録）	Y・A 生	木つゝき（*角川版全集2に収録）	折 蘆 生
30・(10)1	描写の題材と描写の態度（*角川版全集2に収録）	痴 郎	思ひ出す事など（一）	注1 痴 郎 漱 石

○この月、十五日より啄木を選者として「朝日歌壇」が設けられた（六面或は七面に掲載）。

注1 以降四十四年二月二十日まで三十二回にわたり断続して掲載された。

十一月

10・11 断片(*新思想とか新傾向と評されるものが、じゆう分身についたものとなっていないため、深刻な感銘を人に与えないことをのべる) 蒙 生

21 十一月の戯曲(*泡鳴「佐用姫」(中央公論)、吉井勇「河内屋与兵衛」(新思潮)評など) 蒼 瓶

22 批評と生活(*現代人の精神生活の皮相さ、きびしい自己批評の欠如を説く) 能 成

23 朴翁逝く(*死にさいして見られたトルストイの人間味について) 草 平

26 どん底(*昇曙夢訳「どん底」を読んでの感想) 蓬 里 雨

27 朴翁の小説(*長編の規模の雄大さ、短編「三つの死」のニヒリズムが印象的であることなどをのべる) 蒼 瓶

○この月、十七日「土」が百五十一回で完結し、十九日から風葉の「極光」が連載されはじめた。

十二月

3・4 俳句の科学的研究に就て 荻原井泉水

6 「背教者ジウリアノ」を読む(*メレジユコフスキー・島村冬三訳(ホトトギス)を読んでの感想。「影と声」に収録) 能 成

7 自由劇場雑感(*ゴオリキ「夜の宿」、吉井勇「夢助と僧と」の印象。「影と声」に「第三回自由劇場雑感」として収録、角川版全集2に収む) 次 郎

12

二葉亭全集第二巻(*翻訳の巻所収のツルゲーネフの諸作を評し、訳の優秀さをあげ、全体の印象として二葉亭の文学にたいする態度に「どこか遊んでいる処がある」という)

蓬 里 雨

楚 人 冠

19・20 読ませんとする努力
22・23 十二月の小説(*「中央公論」女流作家号、与謝野晶子「兄の家」(三田文学)評など) 蒼 瓶

25 現代的露西亜と「六人集」(*昇曙夢編訳「六人集」(バリモント「夜の叫」・ザイツェフ「静かな曙」・クープリン「閑人」・ソログレーフ「かくれんぼ」・アルツイバーセフ「妻」・アンドレエフ「霧」を収む)評) 吾 孀 真

26・30 今年の劇界 英 一

○この月、文芸欄のほかに、啄木の「歌のいろいろ」(岩波版全集10に収録)が十・十二・十三・十八・二十日の五回にわたって掲載された。また十六日より小説「極光」が六面に移された。二十九・三十・三十一日の文芸欄は四面にある。

◆明治四十四年◆

一月

注1

3 吾等は新しきものゝ味方なり 森田 草平

13・15 対話(*時評。「中央公論」女流作家号について、政府の文芸保護の問題その他) 泣 堇

19・20 一月の小説(*泡鳴「鶴子」(三田文学)、孤蝶「こし方」(同)、鏡花「朱雀日記」(同)、草平「狂言」(中央公論)、青果「おみの」(早稲田文学)、白鳥「呪」(同)評など) 生田 長江

25・26 一月の戯曲(*岡本綺堂「貞任宗任」評など)

27

蒼 瓶
魚住を悼む（*魚住折蘆の生涯は今日の青年の「真面目な煩悶や苦闘を代表した者」であるとのべる）

29

能 成
思想と現実の力（*冷静な思索と情熱的な行動とは常人にあつては一致しがたい、深く考へる故に深く感ずるとは「ひとり宗教的情熱を帯んだ人々」にのみ見いだすことができる、という）
草 平

○この月、四日の文芸欄は四面に掲載されている。

注1 森田草平『続夏目漱石』参照

注2 『続夏目漱石』に三日にわたって掲載されたように書いてあるが、記憶がいがいであろう。

二月

5

観能と観劇（*能の観客の上品な虚偽を批判する）
東 渡 生

7・8

事実と想像と（*白鳥の「芸術に対する懷疑」〔早稲田文学〕にふれて、ありのままに書くか想像をまじえるかが問題なのではなく、いづれにせよ読者に事実と信じさせるように書くことが必須であると論じ、自然主義の「事実を其儘書く」という主張が、型にとられた旧文学を打破して作に実感を与えた点は認めてよいという）
蒼 瓶

9

新時代劇「検察官」（*新時代劇協会の「検察官」上演所感）
セルゲイ・エリセエフ

16

二月の小説（*鷗外「青年」〔スバル〕・「カズイスタカ」〔三田文学〕、秋声「祭」〔新小説〕、「早稲田文学」新進作家号評など）
東 渡 生

17

二月の戯曲（*菅野二十一「鉄輪」〔スバル〕評のほか、

「序に」三重吉の「鳥」〔太陽〕をとりあげる）
蒼 瓶

18・19

楽屋落（*告白小説をいちがいに否定はしないが、それが自己客観でなく、自己弁護のために書かれるかたむぎのあるのは認めがたいという）
桑木 厳翼

24・25

帝国座の脚本「頼朝」
「まこと」から「うそ」（*自然主義の主張・態度の推移を検討し、現実の真は平面描写ではとらえられぬことをのべ、そこに「文芸畢竟虚偽でないか」との論の生じた所以があると指摘する）
能 成

三月

1

脚本募集について（帝劇の人々へ）
蒼 瓶

2

フワルケとデイメル
青山 郊汀

5

面白くない小説（*近來作家の間に興味本位の作をつくらうという声があるが、通俗化には反対である、あくまで個性をいかすべきであり、そのために「面白くない」作ができてしまかまわない、という）
白 川

6・8

博士問題とマードック先生と余（*岩波新版全集20に収録）
（*野上豊一郎）
漱 石

9・10

訳本ツアラトウストラ（*長江訳の評。角川版全集未収録）
次 郎

11・12

翻訳に就て

アンデパンダンスの為に（*絵画の眞の発展をうながすものは、美術館や展覧会という形式ではなく、独立の精神であり、「此の精神は必ず人間と最も関係の深い活きた芸術を産んだ」という）
秋 骨
斎藤 与里

再び事実と想像と

蒼 瓶

仕事と魂（*「思ひ出す事など」二十七における漱石のオイケン批判にふれて、オイケンの指摘する「仕事と魂の痛みしい分離」は今日の事実にはかならぬことをのべる）

マドック先生の日本歴史（*岩波新版全集20に収録）

東 渡 生

三月の小説（*三重吉「赤い鳥」〈中央公論〉、小剣「長火鉢」〈新小説〉、直哉「無邪気な若い法学士」〈白樺〉、園池公致「一年のうち」〈同〉評など）

漱 石

劇壇の為に（*真の意味での「新劇」を確立するために最も必要なのは、俳優の「人」としての自覚であり、また俳優に適切なアドヴァイスを与えうる批評家と演出家の存在であることを強調する）

小宮 豊隆

ゴルキーの近業

セルゲイ・エリセエフ

山崎 楽堂

四月

漱石氏の門を読む（*「静かに、落付いた」書きぶりにひかれるとともに、宗助の過去と現在とに不調和の感があり、その「恐怖」が参禅に結びつくのは唐突だという）

宮 本 生

自由劇場と新時代劇協会とへ（*出し物の選択についての注文。流行にとらわれず、「新」劇壇としての見識を示してほしいと希望する）

蓬 里 雨

病院の春（*のち「思ひ出す事など」三十三となる。岩波新版全集17に収録）

漱 石

博士問題の成行（*岩波新版全集20に収録）

漱 石

危険ならざる文学とは何ぞや（*トルストイ・イブセン・ヴエデキントなどを「危険なる文学」とする論に反駁する）

秋 骨

新聞と文学
○この月、二十六日に「極光」が完結し、二十七日より草平の「自叙伝」が連載されはじめた。

白 川

五月

1 文学者は何故に尊敬せられざるか（*自然主義の勃興以来作家が「芸術家」として尊敬されなくなったことをのべる）

徳田 秋江

11 「おめでたき人」を読む（*素朴真摯な態度にひかれるが、自己批評の鋭さを欠くところを「物足らぬ」と思うという）

能 成

文芸委員は何をするか（*岩波新版全集20に収録）

漱 石

田中王堂氏の「書斎より街頭へ」（*同前）

漱 石

此ごろの浪漫主義（*「新しい浪漫主義」は起るべくして起つたものだけでも、その実態は趣味的・遊戯的であつて、吾等の要求を満足させないという）

蓬 里 雨

六月

坪内博士と「ハムレット」（*岩波新版全集20に収録）

漱 石

自由劇場の印象（*長田秀雄「歓楽の鬼」・雨雀「第一の暁」・勇「河内屋与兵衛」・メーテルリンク「奇蹟」評）

I と A

11

『朝顔』と『モデルのうたへる歌』（*万太郎の「朝顔」〈三田文学〉と蕭々の「モデルのうたへる歌」〈長詩・「スバル」評。前者につき、哀れと寂しみの情調の自然さと主観の統一ある点をあげ、注目すべき作と推賞している）蓬 里 雨
六月の評論（*長江「島崎藤村氏の小説」〈三田文学〉、龍
峡「文明の生みたる悲劇」〈新日本〉、筑水「近代文芸の二
種類」〈太陽〉評など）
宮本 和吉

七月

1
劇場に於る新作物（*当今の創作劇のつまらなさを批判する）
蓬 里 雨

2
3
新と旧（*思想芸術において吾等の求めるのは、名目上の新
旧でなく、「其人の生活に切実な者」、真実の生命の表現であ
る、という。「山中雜記」に収録）
雲 助

4
子規の絵（*岩波新版全集17に収録）
漱 石

(*安倍 能成)

5
7
8
七月の劇と小説（*三重吉「金魚」〈読売〉、白鳥「泥人
形」〈早稲田文学〉、藤村「紅い窓」〈同〉、潤一郎「少年」
〈スバル〉、鷗外「青年」〈同〉、秋声「出産」〈中央公論〉、
阿部省三「山の手の子」〈三田文学〉、万太郎「遊戯」〈同〉
評などのほか、「三田文学」の特色についてのべらる）
蓬 里 雨

13
『さし多』（*最近七年間に「ホトトギス」に掲載された挿画
および諸家の文章を集めた『さし多』についての感想）
鬼 羽 屋

14
16
17
学者と名誉（*岩波新版全集20に収録）
ケーベル先生（*岩波新版全集17に収録）
漱 石

(*野上豊一郎)

19
20

変な音（*同前）
漱 石
早稲田文学記者に与ふ（*「朝顔」評にたいする中村星湖の
反論〈早稲田文学〉への応酬。「朝顔」を「用意の到らぬ」
作とし、古いとする星湖の言につき責任ある説明を求める）
小宮 豊隆

24
自然に對する心
雲 助

25
31
手紙（*岩波新版全集17に収録）
漱 石

○この月、三十一日で「自叙伝」前編の連載が終つた。作者後記
に、都合により後編は掲載を中止し、「新小説」十月号に発表す
る予定とある。また、二十七日から三十一日まで秋声の「徼」の
予告が小説欄にくりかえし掲げられている。以下はその全文であ
る。

「十月頃夏目さんが執筆する迄の繋ぎに何か書きたいと思ふもの
でもあるならば……と云ふ森田君のお話のあつた時に、僕は一寸
二の足を踏んだ。と云ふのは「読売」に「足跡」を書いた時分か
ら、もう一つ書いておきたいものがあるやうな気がして、それが
今「徼」と題してみた此一篇であつたが、其後色々の事から創作
の興味もなくなるし、此篇に取扱はうとする材料に就ても厭気が
さしてゐた、然し差当つて他に如い思ひ附もないから、矢張此を
取上げて見る事にした。断つておきたいのは、描かうとする事柄
は、僕の他の作と同様必ずしも事実其儘でない、と云ふことであ
る。」

八月

1
崖から（*小宮豊隆にこたえて、「朝顔」は主人公の形象が
不自然さを感じさせる故に到らぬ作とするのだと説明する）
中村 星湖

2
『あきらめ』（*田村俊子の「あきらめ」〈大阪朝日懸賞当選

作)の評)

3・4

吉右衛門の文覚(*角川版全集2に収録)

小宮 豊隆 痴 郎

5

私語(*画家の仕事と生活との矛盾についての感想)

与 里

6

文芸院の審査

徳田 秋江

9・10・14・15

八月の小説と戯曲(*鏡花「朴若」〈新小説〉、三重

吉「民子」〈同〉、鷗外「心中」〈中央公論〉、有島生馬

「獣人」〈白樺〉、菅野二十一「父と母」〈三田文学〉、後

藤末雄「誘惑者」〈スバル〉、平出修「長者町」〈同〉評な

己の字

(*森田草平)

祐

11

盲ひたる評家(中村星湖氏に)(*「崖から」に反駁し、主人

公に豪も不自然の感はないとし、星湖の鑑賞眼は色盲同然で

小宮 豊隆

藤

12・13

芝居を見る眼(*角川版全集2に収録)

痴 郎

速

26

論壇の近時(*評論壇の沈滞は、論者自身内に切実な表現の

要求をもたぬところに由来することを説く)

能 成

27

人生の素人——「泥人形」の世評について(*「泥人形」に深

刻な人生観を見いだす世評に反対する)

己の字

29

内生活直写の文学(*角川版全集2に収録)

次 郎

30・31

文壇の高等遊民(*生活にわずらわされることなく、「自己

の為」に文芸を創造し享受しうる人々の意義と役割に期待す

雲 助

る)

○この月、一日から秋声の「徼」が連載されはじめた。なお「徼」は十一月三日八十回で完結した。

九月

4

皮肉と反語(*他の欠点をあげつらつて快よしとするのでな

5

く、自己をも含めた人間全体に向けられるものとして、皮肉

や反語は意味をもつとし、その観点から白鳥の「畜生」を批

評する)

世迷言(*文壇の現況について、白鳥の「泥人形」評その

他)

7・8

愚劣なる帝国劇場(*角川版全集2に収録)

徳田 秋江

10

「徼」を読んで

己の字

11・12

芸術上に於けるデカダンスの意義

藤島 武二

18

文展に出す画

津田 青楓

20・21

九月の文芸評論(*柳宗悦「メチニコフの科学的的人生観」

〈白樺〉、らいてう「原始女性は太陽であった」〈青鞥〉・晶

子「そらごと」〈同〉、抱月「現実主義の分化と新及深」

雲 助

26

九月の評論(*潤一郎「幫間」評など)

丑之助

29

二たび人生の素人(*前文にたいする本間久雄の反駁「観照

上の素人か支人か」〈読売〉への応酬。これにたいして本

間はさらに「森田草平君に答ふ」〈読売〉を書いた)

己の字

十月

4・5

科学と人生(*「白樺」所掲の柳文をとおして、メチニコフ

の見地を考察する)

雲 助

6

ロダンの芸術観(*ポール・グゼル編のロダン語録を一部紹

介する)

後藤 末雄

○この月、三日の六面に与謝野晶子の随筆集を評した安倍能成の「一隅より」を読んで」が掲載された。